

「白石」たびたびすみません、白石です。岩壁先生の方にお伺いしたいんですが、今日レジュメの終わりの方に、仮に『明治天皇紀』の公開がこれからだたらばという仮定でちよつと書かれていますけれども、『孝明天皇紀』の公開のされ方というのをどういうふうに位置づけられるのかというのが質問です。『孝明天皇紀』は、基本的に引用された史料というのは載せてあるという、そういう公開だと思うんですけども、『孝明天皇紀』がもしもこれから公開だという場合に、その公開のされ方がまず変化ありそうなのかどうかですね。墨塗りなり何なり伏せ字なり、それが必要になりそうなのかどうかと。でも、もし必要になりそうだとするのであれば、その『孝明天皇紀』が既にそういうオープンな形で公開されているということを、今後の『大正天皇実録』なり『昭和天皇実録』、まあ編纂中ということですが、先例とか、そういうふうな位置づけけると、そういうことが可能なのかどうかというところをちよつとお伺いしたいんですけども。

「岩壁」『孝明天皇紀』がこれから公開されるとすれば、どういうかたちになるかとの質問と受け止めて回答します。実は昨年戦前に図書寮の編修課が編纂した『天皇皇族実録』を完全なかたちで公開いたしました。これには『孝明天皇紀』とは異なる孝明天皇の実録が含まれています。従つて、これをもつて前近代の天皇の実録については宮内庁として公開する慣行にあるとの判断がなされれば、現在でも『孝明天皇紀』は公開されると思います。少なくとも編修課のひとりとして私は公開を主張しますが、実際どうなるかは微妙なところでしょう。

また、今編纂中の『昭和天皇実録』がどのようなかたちで公開されるのかというご質問であれば、現状では『大正天皇実録』の公開が情報公開法の施行令を非常に厳格に適用して行われていますから、今後この法体制が続けば『昭和天皇実録』も同様に扱われることは間違いないと思います。しかし私も編修者のひとりですから、個人的には編纂された実録が公にされないというのは残念です。

「小池」ありがとうございます。それでは、大分時間が超過してしまいましたけれども、今日は実り多い時間でした。最後に閉会の辞を、文書館設立準備委員会委員長の頼先生の方からお願いしたいと思います。お願いします。

閉会あいさつ

頼 祺一

それでは、ここでやらしていただきますけれども、来年度から広島大学も文書館を立ち上げるということを全学にお約束いただいて、私も広島大学の二十五年史というものの編纂の責任者じゃないですけども、中心になつてやつて、それでたまたまずっといるものですから五十年史も、お前やれと前学長から言われましてですね。まあ前の学長さんの判断では、もう部局史なんか作らないうと、全学の移転の経過記録みたいなものを作ってるし、まあ統合移転までのその後の歴史を簡単にまとめて、君なら二、三カ月でやれるだろうというような

話を最初受けまして、そんなもんじゃございませんという事で、実は取り組んでおりますが、その中でやはり二十五年史の時に集めた資料等が非常にもう散逸してしまつたと。これは図書館の一室へそのまま入れてたんですけども、それが知らない間にですね、無くなつていつたということなんです。だからそれはまあなぜかの問題もあるけど、やはり恒久的にそういうものを、少なくともそういうものだけでも残すような施設が必要じゃないかというようなことで。まああの二十五年史の時からの変化を思ひますとですね、今非常にこういう文書の保存とか歴史資料が大事だという意識が非常に高まつておりますし、特に大学あたりでもですね、やはりそういう意識がまあ徐々にではありますけども浸透してきた。だからそれがまあ、先ほどのお話にも出てましたように、移転の時に実際もう相当処分されて。まあ九大人さんも今から移転されるんで、やはりその中でどういうものをほんとに大事な将来のために残していくかという、やはり大問題だろうと思つてうんですね。だからそういう議論すらなく、まあそれぞれその時に担当者の判断で廃棄されて、それで実際なくなつていける。それで五十年史の編纂が難しいという現状もあるわけですけども、やはり一つそういう施設なり機構的なものを作っておけばですね、それをさらに有効に利用するような形で将来につなげていけるというふうにはまあ考えて。

今回は、この準備室の小池先生の肝いりで、有川先生と岩壁先生、遠路お運びいただきまして、この点につきましてもですね、まあプレ・シンポジウムということですけども、大学史の編纂あたりでも二十五

年前にやつとつた編纂の状況と今はもう全然違つと、全国のネットワークができてきているというようなことでございますし、やはり、それなりにですね、私としてはまあ徐々にではあるけども進歩していると思ひます。

しかしそれがやはりまだ現在では歴史をやる人がどうしても中心になつていけるけれども、今から特に情報公開の、特にもうITなんていう、僕らはもうパソコン打つのも嫌なぐらいな人間ですからですね。本学でもIT担当の学長補佐が実際にいてですね、将来のことをいろいろやつてるわけで、僕らはいつまでもこの紙紙いうようなことを。で意見がなかなかまとまらないところもあるんですけども、そういうものをうまく統合させて、やはり将来、こういう我々の先輩たちが残した記録をどう伝えていくか、これは私の個人的な歴史史料、歴史をやつておりますから、そのことをやはり考えていかないと、最初の有川先生のお話にあつたように、やつぱり歴史を大事にしなければですね、この将来もないんだということをそれぞれが自覚するという点で、今日のシンポジウムは、非常にいろいろと、私どものためにもありがたかつたし、ご参会の皆様にもそれなりに受け止められるところがあつたんじゃないかと思ひます。

それでね、その先ほど法学部の先生のお話ですけども、これまさにですね、僕も部局長会議に出ていつも思つてるんですよ。こんな膨大な資料を議論の過程、まああんまり部局長会議とか評議会では議論しません。これは思ひの外ですね、これは評価、大学の管理運営の評価を読んでいただけると分かつたと思ひます。実際参列した評価者が

ちよつと驚いたと。つまらん議論もしとるといふようなことも実際あるわけですね、この。しかしそういうものの、議題に上げられる過程の資料というのは、実にすごいんですね、これ。だからそれが最後のまあ一行にはなるけども、資料としてこのくらい会議ごとにつきますけども、まあ、それはそれなりに、やはり残っていくものだと思います。それで、小池先生の先ほどのお話にもあったように、特にこの委員会ですね。いろんな政策決定過程の委員会資料というものをどう残すか、それはもう個人の資料につながっていくわけ。だからその当時の委員長の資料をもう全部提供してもらおうとかですね。まあ恐らくいろんな方法があると思うんで、私の体験からいえば、例えば総務部長さんの部屋にですね、この段ボールで二、三箱には必ずなるわけですね。ところがもう辞められる時「これ残していつてください」、「いや絶対捨てていく」とおっしゃってますね、捨てられるわけなんです。だから、そういうのをどう残すかっていうのは、やっぱりそれぞれ知恵を絞って、やっぱり将来のために大事なんだということを共通認識でやっていかないと、やっぱり歴史を忘れた、まあ我々の場合ですと大学になってしまふんじゃないかというふうに考えております。

いろいろ申したいこともございますけども、今日はまあ一応プレ・シンポジウムということでこういうもの、こういう情報交換の機会をですね、やはりたびたび他の機関とも連絡を取りながらですね、将来とも進めていくのも将来の文書館の役割だろうと思っておりますので、どうかご後援方よろしく願います。本日はどうもありがとうございます。両先生、どうもありがとうございました。ま

た、九大の方からたくさんおいでいただいて、広大より多いんじゃないかと、最初ちよつと心配したんですけども、本当に遠路お越しいただいた先生方、ありがとうございます。どうも、それじゃ、これで終了させていただきます。

本稿は、平成一五(二〇〇三)年一〇月四日に開催した広島大学文書館設立準備企画公開プレ・シンポジウム「大学・編纂・文書館」(於広島大学附属図書館中央図書館ライブラリーホール)での講演・質疑の内容を文章化したものです。

当日の録音テープをもとに若干の修正を加えてありますが、内容的には当日の講演と異なるところはございません。講演者・司会者には文章を確認していただきましたが、フロアからの発言者についてはこれを行っておりません。発言の意図を取り違えているところもあろうかと思いますが、ご海容ください。

なお、当日配付したプログラム、アンケートとアンケート集計結果を掲載しておりますので、併せてご参照ください。

最後になりましたが、お忙しいなか遠路お越しいただき貴重な講演をしてくださった有川節夫・岩壁義光両氏をはじめ、プレ・シンポジウムにご参加くださって方々に改めてお礼申し上げます。

(広島大学文書館設立準備室)